日本学術振興会に紙媒体で提出する必要はありません。

様　式　Ｆ－７－１

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）実施状況報告書（研究実施状況報告書）（令和元年度）

機関番号	３２６０４

所属研究機関名称		大妻女子大学
研究代表者	部局	文学部
	職	講師
	氏名	榎本　恵子

１．研究種目名　基盤研究(C)(一般)　　２．課題番号　17K02598

３．研究課題名　17・18世紀フランスにおける文献資料に見るモリエールと古典ラテン喜劇作家の受容

４．補助事業期間　平成２９年度～令和２年度

５．研究実績の概要

モリエールは国王ルイ14世の要望に応え、文化的政策の面から絶対君主制確立に一役買った。彼が古典ラテン喜劇作家から受け継いだ理想の喜劇を具現化したからである。モリエールが舞台上に描き出す「現実の世界」と為政者と観客が求めるものを提供した作品に17世紀フランス文学界は、彼を「プラウトゥスとテレンティウス再来」であると高く評価した。以降モリエールは「フランス喜劇の父」と称されるようになった。同時に悲劇より下に見られてきた喜劇がモリエールの本格喜劇により現実を映し出す鏡として、観客を「愉しませながら教え諭す」ものであるという認識が受容された。モリエールの死後、彼を凌ぐ作家が現れなかったため、喜劇は衰退したかのように見えた。しかしモリエールの作品が人々を魅了し続け、21世紀の我々が見ても色あせることのない普遍性を有していることは周知の事実である。

ではこの普遍性とは何か、時代により人々の嗜好が変化してもモリエールの作品が評価され続けたのはなぜか。17世紀から現在に至るまで「喜劇の父」として評価されてきたモリエールの真の評価を検証してきたが、時代の流れの中でその評価に変遷があった。しかし、興味深いことにそれは時代の求める嗜好によって変化するが、それでも最終的にこの劇作家を「評価する」という事実は変わらなかった。

2019年9月に17、18、19世紀の専門家を交えてワークショップを開催し、それぞれの世紀におけるモリエールの受容を考察した。その結果、いつの時代においても、劇作に関わる者だけでなく、劇作に興味を持つ文化人にモリエールが多大な影響を与えていることが浮き彫りになった。また申請者自身の研究において、19世紀ロマン主義演劇における古典主義演劇はドイツロマン主義の影響を受けており、そのドイツロマン主義演劇はモリエールを熟考した18世紀フランスの演劇論の上に成り立っていることを確認した。

６．キーワード

フランス演劇　モリエール　古典ラテン喜劇　ルイ14世

７．現在までの進捗状況

区分　(3) やや遅れている。

理由

当該年度に開催したワークショップはフランス本国における新学年開始の9月になったため、研究者を招聘することができず国内の研究者を招聘した。そこで春期休暇を利用して、フランス在住の研究者とその結果を共有する予定であったが、新型コロナウィルスによる感染拡大を受けて延期にした。今後の情勢をみて本研究のまとめを進めていきたいと考えている。

【研究代表者・所属研究機関控】

日本学術振興会に紙媒体で提出する必要はありません。

１版

８．今後の研究の推進方策

まず春期休暇に延期したフランス在住の研究者と前年度のワークショップの内容を共有したい。
そして、ワークショップにおいて17，18，19世紀と時の流れの中にモリエールのイメージは存在し評価されていたが、そのイメージはそれぞれの時代に合った定説の上に成り立っていたことが判明した。モリエールをはじめとする古典主義演劇の受容が文学史的流れの中での総括と、そこに属する文壇の評価との間に乖離があったということである。今後は17、18世紀におけるモリエールの評価をまとめ、それが19世紀にどのように受容されていくのかとテーマを拡大していく準備をしたいと考えている。

９．次年度使用が生じた理由と使用計画

2020年3月、春期休暇を利用して、フランス在住の研究者とその結果を共有する予定であったが、新型コロナウィルスによる感染拡大を受けて延期にした。今後の情勢をみて年内に渡仏、本研究のまとめを行う予定である。

１０．研究発表（令和元年度の研究成果）

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 榎本恵子	４．巻 第18号
２．論文標題 モリエールのドラマツルギー～Defi　挑戦<3>～『町人貴族』あるいはコメディ・バレエという幻想	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『コミュニケーション文化論集』	６．最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

１１．研究成果による産業財産権の出願・取得状況

計0件（うち出願0件／うち取得0件）

１２．科研費を使用して開催した国際研究集会

計0件

１３．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

－

１４．備考

－